九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ミル『経済学原理』の基本構造とその学史的位置

宮崎，喜代司

https://doi.org/10.15017/4362483

出版情報：經濟學研究. 25 (3), pp.23-60, 1960-01-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

ミル『経済学原理』の基本構造とその学史的位置

宮崎喜代司

一　いわゆる三分法に即して

J・S・ミルの『経済学原理』の基幹部分は、生産、分配、交換の三篇に分かたれている。この、いわば三分法とでもいうべき篇別構成は、それがミルほどの体系家によってとりあげられたものであるということから判断すれば、彼の経済学を全体として理解するためには、極めて重要な意義をもつものと考えられる。ミル自身もまた、この三分法には、独自なアクセントをおいているようである。後にみるように、彼はこの三分法こそが彼の経済学にとって最も適切な篇別構成であると確信していたのである。そこでまずその内容をみてみよう。

ミルによれば、生産を支配する法則は、「物理的真理の性質を帯びているものであって、人の意のままに左右されるといつだところがすこしもない」[1]ものである。いわばそれは自然的必然にしたがうものである。曰く「およそ人間の生産する物はいずれも、外物の素質と人間の身心の天性とが定めるところに従って生産されねばならない。人々の好むと好まざる

とにかかわらず、生産の高は従前の蓄積の高によつて限られ、しかも仮に蓄積の高を一定とすれば、生産の高は人々の精力、技術、機械の完全、分業の利用の程度に比例する。……。われわれは物質または精神の根本性質をすこしも変更しうるものではなく、ただわれわれは、ある結果を得んために右の性質を利用しうるのみである。[2]」

ところが分配を支配する法則については事情はむしろ反対である。「これはもつぱら人為の制度の問題である。物が存在しさえすれば、個人であれ団体であれ、これを自己の欲するままに処分しうる。その処分をいかなる人にも任すことができるし、これを与える条件をどのようにも定めることができる。[3]」社会生活においてはこの処分は、社会または社会の権力の許諾を得てなされる。これはつまるところ、「富の分配は社会の法律、習慣によつて定まる[4]」ということに他ならない。このような「富の分配の規律は社会の支配階級の意見、感情のままに形づくられるものであつて、しかも時代を異にし国を異にするにしたがつて大いに異なるものである。しかも人間の望み次第で、なお一層異なりうるものである。[5]」生産法則の自然的必然性に鋭く対立する分配法則の人為的任意性の高調。しかしそのなかにも支配階級の意見、感情を規制するようにもいつているかにとれる、歴史的、地理的、社会的条件への言及がある。実はミルにおいても分配の法則は全く偶然的なものではないのである。曰く、

「もつとも人間の意見や感情は、偶然のものではない。人間の意見や感情は、現在の知識、経験、社会制度、智徳の状態と人性の根本法則とが結びあつてできた結果である。しかしわれわれは、ここで人間の意見の発生の法則を論じようとするものではない。この問題は、人間進歩の一般論の一部であつて、経済学の範囲よりはるかに大きな困難な問題である。

ここでわれわれは富の分配の法則の原因ではなく、結果を研究しなければならない。そしてこの結果は、あたかも生産の法則の場合のように人為によつて左右されるところが少く、物理法則の色調が濃厚である[6]」と。

すなわち、分配を支配する法則の人為的任意性といつても、それは一面でのことであつた。他面では特殊な――一種の社会的・歴史的な――必然性が認められていることに、特に注意しなければならない。ミルにおいてこのような分配法則の二面性が認識されていたということについては、従来あまりたちいつた考察は行われていなかつたようであるが、この点は極めて重要である。しかしこの点についての考察は後にゆずつて、いまは引続き交換論についてのミルの見解をみてみよう。

第三篇「交換」第一章「価値」の序説においてミルは、次のようにいつている。

「われわれがこれから論じようとする問題は、経済学上きわめて重大かつ顕要な位置を占めている問題であつて、したがつてある思索家に至つては、本問題の境界と経済学そのものの境界とを混同しているくらいである。卓抜な一経済学者は、経済学を Catallactics すなわち『交換学』と名づけるべきだといい、またある著述家は、経済学を『価値学』と呼んでいる。私がもしこれらの呼方を正当と認めるものならば、私はまず価値の根本法則を本書の冒頭において論ずべきであつて、このように遅ればせに第三篇で論ずるようなことはしないであろう。しかるに価値法則の論述をこのように延引しうるということから考えても、経済学の本質を右のように見る見方は狭きに失することが明らかである。[7]」

ミルが、それまでの正統的な考え方に対抗して、自己の新しい経済学体系観を前面におし出そうとしている気負つた様

子が、この文章の中にうかがわれる。では、ミルは一体どんな理由から、交換論をこのような位置におこうとするのか。曰く、

「たとえ社会の仕組が『交換』に基づかないものであり、または交換を許さないものであるにしても、『生産』の条件および法則はやはり、今日見られる通りであろう。現今の産業生活を見ると、分業がよく行われ、生産当事者の報酬はすべてその商品の価格によつているが、このような今日の産業制度においてすら、交換が生産物分配の根本法則ではないということは、あたかも道路や馬車が運動の根本法則ではなくて運動の一機関たるに過ぎないのと同様である。これらの観念を混同するのは、論理上から見ても実際上から見ても大きな誤りであると思う。事物の本質から生ずる必要と、社会の仕組から生ずる必要とを区別しないという誤謬こそは、経済学上実に多い誤謬であつて、右の場合もその一である。(8)」

みられる通り、交換が生産および分配を根本的に支配する法則ではないというのがその理由である。ミルにとつては交換は結局、経済学の一部分、一分野にすぎない。しかし、だからといつて彼が、交換を過少評価しているかといえば決してそうではない。むしろ逆である。続けて曰く、

「今日のような社会状態においては、産業制度は全く売買を基礎とし、各人は大抵、その参加した生産の所産を以て生活せず、二回の交換すなわち販売に次ぐ購買によつて得られる物をもつて生活するのであるが、このような社会状態においては『価値』の問題こそは根本的なものである(9)」と。

こういいながらミルは、他方でこのような現今の社会にとつて根本的な価値の問題を分析すべき理論は、もはや究明す

べき余地が全くないほどであるという。「価値の理論は完璧である」[10]というわけである。したがつてもしミルが交換論においてなにか独自な追加をなしたとすれば、それはやはり交換論の位置を三分法の中に確定したということであろう。このことが何をねらいとしていたかといえば、それは経済学者がおかしやすい二つの誤謬、すなわち一方で「ただ一時的真理に過ぎないものを、永久的な普遍的な法則の中に列し」[11]てしまうこと、他方で「生産の永久的法則（たとえば人口制限の必要の基づく法則）と、今日の社会の組立から生ずる一時的偶然（かかるものは社会制度革新者が随意に改廃し得るところのものである）とを、とり間違える」[12]こと、これらを避けるためであつた。

以上をみるに、結局、ミルが生産・分配・交換の三分法をとつたのは、現今の商品交換経済の特殊歴史的な性格を、彼なりに明確に輪廓づけるためのものである。そして、それが相応の論理的一貫性をもつているということも、否定はできないであろう。それはそれとしても、彼がこのような歴史的立場に立とうとするその仕方は、極めて特異なものであることには注意しなければならない。

ミルは、交換論の位置に関する彼の見解でみられるように、基本的には、生産論と分配論という経済学の二大領域を峻別しつつ、これらをもう一つの領域である交換論の外側におく。これは『資本論』の構造序列とはまさに正反対のものである。『資本論』においては、第一巻第一篇に「商品と貨幣」がおかれ、第二篇「貨幣の資本への転化」がこれに続いて、ここで労働力商品が発見される。次いで第三篇において「絶対的剰余価値の生産」がとりあつかわれる。これをミルの三分法の用語にひきなおして表現すれば、『資本論』の基本構造は、次のようになる。まずはじめに商品と貨幣の相互転態運

動をあつかう「交換」論がおかれる。次にこの「交換」の論理に貫かれ、これを含みこんだ労働力、つまり労働力商品において結合され一体化された「生産」論と「分配」論がおかれているということであろう。もちろん、ミルの三分法の用語をもつて『資本論』の論理構造を全面にわたつてとらえ、かつ表現することには問題もあるし、また困難でもある。しかし極めて巨視的な構造についてならば、近似的にできないこともないであろう。ミルの三分法とても全く偶然に生じたのではなく、古典経済学の理論の歴史的発展のなかから徐々に形成されてきたものである。その限り三分法の用語法は、同じ古典経済学の中から生まれた『資本論』の構造を、ある程度までは表現することが可能なはずである。（このようにみる仕方は、いつてみればつまり、ミルからマルクスを測ることである。もつと拡張していえば、古典経済学から『資本論』をみる見方ともいうべきものである。）

ところで、このようにみた場合の、労働力商品において一体化されている生産と分配といつても、この両者の間には次のような連関と論理的序列とが認められる。『経済学批判序説』においては次のようにいわれているのである。

「分配は、生産物の分配である前に、(1)生産用具の分配であり、(2)同じ関係のよりたちいつた規定ではあるが、さまざまな種類の生産への社会成員の分配である。（一定の生産関係のもとに個人を包摂すること。）生産物の分配は、あきらかに、生産過程そのものの内部にふくまれていて生産の仕組を規定しているかかる分配の結果にすぎない。生産にふくまれているこの分配を無視して生産を考察することは、あきらかに空虚な抽象なのであるが、他面では逆に、生産物の分配はもともと生産の一要因をなしているこの分配とともにおのずからあたえられているのである。」[13]

つまり生産と分配の連関についてみれば、前者が後者を包摂しているということである。それでは両者の論理的序列はどうかといえば、同じく『経済学批判序説』は引続いて次のようにいつている。

「生産そのものを規定するこの分配が生産にたいしてどんな関係をもつているかは、明らかに生産そのものの内部に属する問題である。もしこのばあい、生産は生産用具のある一定の分配から出発しなければならないから、少くともこの意味での分配は、生産にさきだち、その前提をなしているのであるというひとがあるとすれば、これにたいしては、生産は事実上その諸条件と諸前提をもつており、これらが生産の要因をなしているのであると答えることができよう。これらのものは、一番はじめには自然発生的なものとしてあらわれるかもしれない。しかしそれらは、生産の過程そのものによつて、自然発生的なものから歴史的なものに転化されるのである。」(14)

生産は分配を包摂するが、その内部における生産用具の分配という意味での分配は、事実上生産にさきだち、その前提となつている。生産が包摂者であるということは、それが生産用具の分配を前提としながらも、生産の過程そのものによつて、かかる分配をその結果として生ぜしめるようになるという意味においてであろう。労働力商品の生成にあたつても、生産手段を奪われた階級と、生産手段を私有独占する階級への分裂がその前提的な契機である。しかし、このような生産手段分配の関係、すなわち生産関係は、生産過程そのものの中で再生産され、むしろその結果として現われてくる。生産こそが包摂者である。同じく『批判序説』はいう。「われわれが到達した結果は、生産・分配・交換・消費が同一だということではなくて、それらが一個の総体の全肢節を、ひとつの統一の内部での区別をなしているということである。生産

は、生産の対立的規定における自分を包摂しているのと同様に、ほかの諸要因をも包摂している。過程はつねに新らしく生産からはじまる。交換と消費とが包摂者になることができないことは、おのずから明らかである」[15]と。『資本論』の基底にはこのような経済学の体系的構造に関する見解がおかれているのである。このことからすれば、『資本論』の三分法的用語法における論理構造は、〔交換→交換を含んだ分配→分配を含んだ生産〕という図式で表わすことができるであろう。

この構造図式からもわかるとおり、『資本論』においては、まずミルの交換論にほぼ照応する商品論で把握された商品範疇が労働力に浸透することによって、労働力商品なる範疇を生ぜしめる。その結果、商品の運動を支配する価値法則が、流通面のみならず、深く資本制的な生産・分配の内部にまで浸透してこれらを規制する反面、このことによって価値法則そのものが逆にまた根拠づけられるのである。そして資本制生産社会の歴史的性格は、『資本論』のばあい、まさに生産と分配とが労働力商品において一体化され、かつそれが商品の運動法則つまり価値法則に基づいて行われているということのなかにあることが高調されねばならない。これをミル的用語法でいって、交換論が分配論および生産論に包摂されていることのなかに、資本制生産社会の歴史的性格を認める立場であるとすれば、ミルのばあいはどうなるのか。それは、逆に交換論が相互に峻別された生産論と分配論の外部に排除されていることのなかに、社会の歴史性を認める立場であるといえよう。ミルの特異性とはこのことである。

だがここで「外部」ということについては少しく附言しておかねばならない。ミルにおいては、生産がもつとも根元的

な永久法則の世界として考えられる。次いで社会の歴史的性格は、まず分配論にその根拠が求められ、交換論でより具体化される。ところでこの交換論が対象とするのは、実は分配のごく特殊な場合、つまり私有財産制度のもと「分配に慣習がはたらかず競争がはたらく場合のみである」[16]。この点からすればミルにおいても交換は分配の「外部」にあるのではなく、むしろこれに包摂されているといえる。しかしながらミルは別に、第三篇第二十六章「交換が分配に及ぼす影響」においては、交換および貨幣が労賃、地代、利潤の各法則、総じて分配に何の影響も及ぼすものでないといいきつているのである[17]。つまり、ミルにとつては交換は形式的には分配に含まれる一形式であるが、実質的には分配に何の関係もない外的なものなのである。「外部」という意味は実質的に外的なということと解したい。この点を考慮すれば、ミルの場合、形式的には生産が分配を、分配が交換をそれぞれ含んでいるが、実質的には、分配は生産の、交換は分配のそれぞれ外部にあるといつてもよいであろう。これをさきの例にならつて整理すれば実質的には〔生産→生産の外部の分配→分配の外部の交換〕、そして、形式的には〔生産→生産に含まれた分配→分配に含まれた交換〕ということになる。この図式が『資本論』の構造図式、〔交換→交換を含んだ分配→分配を含んだ生産〕とは全く正反対の対照的な構造を示していることは一目瞭然である。すなわち、『資本論』においては、実質的な最終的包摂者たる生産が叙述の序列としては最後に位置し、次に分配、そして最終的被包摂者たる交換が叙述序列の冒頭におかれて全体が構成されている。これに対してミルの場合は、形式的な最終的包摂者たる生産が叙述序列の冒頭におかれ、次いで分配、そして最終的被包摂者がその最後におかれて全体が構成される。しかし、この全体は決して実質的・内的な統一にあるのではなくて、その各部分はむしろ外的に反

撥もしくは無関心な状態にある点で『資本論』の場合とは逆である。

さて、以上みたところから、図式を一層明確化してみる。すなわち、マルクスの、【{(交換)→分配}→生産】に対するミルの、【生産→{分配→(交換)}】(但し形式的包摂関係)。ミルの『経済学原理』の基本構造をこのように理解することには、極めて論理整合的な都合よさがあるように思われる。しかし、この都合よさに安住することは、この構造図式が非常に簡単化されているだけにまた危険でもあろう。それを避けるためには、もう一歩たちいつて、この構造図式そのものを成立させている根拠を探らなければならない。

(1) J. S. Mill, Principles of Political Economy with Some of their Applications to Social Philosophy, edited by W. J. Ashley, p. 199. 戸田正雄訳『ミル経済学原理』2ノ五頁。(但し訳文には些少の変更がある)

(2) Ibid., pp. 199—200. 邦訳2ノ五—六頁。

(3)(4) Ibid., p. 200. 邦訳2ノ六頁。

(5) Ibid., p. 200. 邦訳2ノ六—七頁。

(6) Ibid., p. 200. 邦訳2ノ七頁。

(7) Ibid., p. 435. 邦訳3ノ五頁。

(8) Ibid., pp. 435—436. 邦訳3ノ六頁。

(9) Ibid., p. 436. 邦訳3ノ六頁。

(10) Ibid., p. 436. 邦訳3ノ七頁。

(11)(12) Ibid., p. 436. 邦訳3ノ六頁。
(13) マルクス『経済学批判序説』(岩波文庫、武田他訳『経済学批判』所収)三〇六頁。
(14) 同訳三〇七頁。
(15) 同訳三一〇—三一一頁。
(16) Mill, op. cit., p. 435. 邦訳3ノ五頁。
(17) Cf., Ibid., pp. 689—694. 邦訳3ノ四二六—四三六頁参照。

二　労働力商品把握をめぐつて

実のところ、ミルの三分法はさきにみた構造図式ほど徹底したものでもなければ明晰なものでもない。というのは、その生産論、分配論が交換に関係するものを、完全には排除していないと考えられるからである。ミルは第三篇「交換」第一章「価値」の序説のなかで、分配に価値が関係していることを認めている。さらにまた、その生産論は自然的永久的な法則を追求すると称しながらも、その具体的内容は、事実上、労働力商品——商品という限りで交換と関係している——を基軸とする資本制生産を対象としての考察である。たしかに、ミルは資本について、一方では「再生産に用いられる富」[1]とか「労働所産の貯蓄」[2]であるとか規定している。その限りではたてまえとして自然的な素材視点に立つてはいる。しかし他方ではいたるところで——例えば第一篇第五章「資本に関する根本命題」の第九節「物品に対する需要は、労働に対する需要ではない」などにおいて——事実上、資本と賃労働との関係をしのびこませているのである。ここでミルのいう

「資本の第四の根本法則」とは、「労働に対する需要は、生産に先立つ賃金によってつくられるものであって、商品に対する需要によってつくられるものではない」[3]ということなのである。これが何を前提としていわれているのかはおのずと明らかであろう。『経済学批判序説』もこの点については次のようにはっきりと、とらえている。

「かれら（ブルジョア経済学者――引用者）においては、生産はむしろ、――たとえばミルをみよ――分配などと区別して歴史から独立した永遠の自然法則のわくにはめこまれたものとして叙述されるべきものなのであり、しかもその機会に、まったくこっそりと、ブルジョア的諸関係が、社会 in abstracto ≪一般≫の反駁できない自然法則としておしつけられるのである。これが全体のやり方の多かれ少なかれ意識された目的である。分配ではこの反対に、人間は、事実上、ありとあらゆる勝手なやり方をしてきたというのである。[4]」

以上要するに、ミルの三分法を不透明ならしめているのは、生産論、分配論のなかに残存している労働力商品の論理であるということであろう。もちろんミルは労働力商品ということで正しく形態規定を把握していたのではなかった。彼が、事実上、資本と賃労働の関係を考察対象としていたといっても、かかる関係の基軸をなす労働力商品は、その社会的形態規定を欠いだ抽象的な機能実体の面でのみとらえられていたにすぎない。そして実は、このことこそが、ミルの三分法における生産・分配峻別論を生ぜしめた最大の原因なのである。資本制生産の生殖細胞たる労働力商品が、形態規定を欠いで細胞膜をもたない無定形な原形質としてしか把握されていないならば、そこにどういうことが起るか。一方では当然、労働つまり生産が非歴史的な、社会一般に通ずるものとして、自然的素材視点からとらえられざるをえないであろ

う。また他方では、資本家による剰余価値取得の法則性が生産過程から分離される結果、分配は必然的な根拠をもたず、人為的制度に委ねられたものとして理解されるようになるであろう。こうして、生産が自然必然的なものになつたちようどその程度だけ、分配は逆方向に人為的任意性をおびてくる。生産と分配とが相互に両極分解をとげるわけである。

しかし、反面また、ミルが没概念的な仕方であるにせよ、とにかく事実上、労働力商品を考察対象としていたという積極的な面が、彼の三分法にとつて極めて重要な意味をもつていることを見落してはならない。この面では、分配は人間の意識から独立して決定されるものと理解されうるであろう。さきにみたように、ミルは分配法則の結果が「人為的に支配されること少く、物理法則の色調が濃厚である」といつているのであるが、そのあと続けて次のようにもいつている。すなわち、「人は自分の行為を制御することはできるが、しかしその行為が自分または他人に及ぼす結果を任意に制御しうるものではない。社会はその最良と考える規則を自由に選定して富の分配に当らしめることができる。しかし一旦この規則が設けられた以上、この規則から実際どのような結果が生ずるであろうかということは、他のあらゆる物的・心的な真理の場合のように、観察や推理によつてこれを明らかにせねばならぬ。」[5] 一旦分配の規則、つまり生産関係が定まれば、人間はそれから生ずる結果を制御することは不可能である。したがつてまたそれは観察と推理――実証的な科学としての経済学の分配論――によつて明らかにしうる客観的法則性をもつ。制御不可能な、他人に及ぼす結果とは、つまりは社会に及ぼす結果のことであろう。ここには没概念的ではあるにせよ、とにかく物神化され外化された資本制生産社会の分配法則についての、経験的認識がみられるといつても、過言ではあるまい。

結局、ミル分配論にみられる二面性――分配法則の原因の人為的任意性と、その結果の擬似自然的必然性の共存――の根拠は、消極・積極の二面を有する、没概念的な・形態規定ぬきの労働力商品把握にあることが明らかである。そしてこのうちの消極面が、生産・分配の両極分解を促進したものとすれば、逆にその積極面がこの傾向を制御して、三分法の完全な解体を防いだということもいえる。これは方法論の問題になるが、実はミルをしてコントに反対して、経済学を社会学に解消せしめないようにさせた、最大の理由はこの点にあつたとも考えられるのである。

こうして、ミルの『経済学原理』においては、形態規定ぬきで没概念的に把握された労働力商品の論理――機能実体のみの――が、生産と分配の二領域に残存しているということを考慮した場合、さきの構造図式はより具体的に理解されうるものとなつた。ミルの三分法は表面で生産・分配・交換の整然とした構造をもちながら、その深層においては、没概念的な労働力商品の把握を基軸として、三分法そのものの分解と結合の二面的な動的傾向を統一しているのである。没概念的な労働力商品把握は、ミル『経済学原理』体系に作用する斥力と引力とを、その中に一体化している中核に他ならない。それに三分法の表層と深層とのこの二重構造が、それぞれ、商品の論理と労働力商品の論理に関連しているという対応構造も、また容易に理解されるところであろう。ところでこのような構造の根拠をなすものが、他ならぬ労働力商品の把握の仕方にあるとすれば、ミル『経済学原理』とマルクス『資本論』との対照的性格はますます顕著なものであるといえる。マルクスこそは、それまでの古典経済学を超えて、はじめて労働力商品の形態規定を明らかにし、これをまさしく概念的に把握した経済学者だつたからである。ミルとマルクスとは、その労働力商品把握が没概念的であるか、あるいはま

た概念的であるかという、経済学の理論のまさに中核ともいうべき部分において、決定的に対立しているのである。（しかし、この対立は、把握の誤りと正しさとの対立であるから、むしろ経済学の発展段階の間の対立、つまり経済学史上の時間的なそれと考えるべきであろう）。

さて以上みたところからすれば、ミルの『経済学原理』とマルクスの『資本論』のそれぞれの構造の間には、決して偶然的なものとは考えられない、極めて明確でかつ顕著な対立関係があることがわかつたのであるが、このことは一体、何を意味するのであろうか。完全に表裏の関係にあるといつてもよいほどの、両者のこのような対立は、マルクスの経済学との対比において、ミルの経済学にこれまで与えられていなかつた、大きな比重をかけねばならないことを示唆しているように思われるのである。たしかに、マルクス自身はそれ程の比重をミルにかけてはいなかつたようである。彼はイギリス古典経済学の精髄を、主としてスミスやリカード、就中後者から摂取したのであつて、ミルはマルクス自身とリカードとの間にあつては、単なる「堆土」の高さしか認められていない。しかし前述のようなミルとマルクスとの対立を考えるならば、どうしてもマルクスがミルをとびこえてリカードと直結していたとは思われない。マルクスは、実は、ミルの経済学への強い対立意識を潜在的にもつていて、これを媒介環としてリカードに結びついたのではないだろうか。リカードの経済学は、ミルの経済学を経て、はじめてマルクスに摂取されるべきものではなかつたのか。マルクスよりも経済学史的には一段階古い時点にありながらも、マルクスの経済学とはまつたく正反対の構造をもつミルの経済学について考えるとき、このような疑問が湧いてこざるをえない。もつと問題を明確にしよう。

マルクスはミルをどのように評価していたのであろうか。周知のとおり彼は、一方でミルの経済学の「生気のない折衷論」的性格を批判するとともに、他方では、自らの経済学の源泉である古典経済学を、「イギリスではウイリアム・ペティ……にはじまり、……リカードにおわる」[7]ものとして、ミルをその代表者のなかに数えていない。また、『剰余価値学説史』においては、ミルを「リカード学派の解消」の最後に位置するものとしてとりあげるにとどまつている。[8] このことからすれば、マルクスはミルをリカードから区別されるべき自立性をもつた独自的な経済学者とは認めていなかつた、といつてもよいであろう。[9] 問題はここにある。もしリカードとマルクスとの間にミルが媒介者として位置づけられるべきものならば、当然、マルクスの評価とは異なつてミルはリカードから区別されうる独自的な自立性をもたなければならない。この点が明らかにされるならば、前述の疑問は解決できるであろう。またマルクスのミル評価の妥当性の検証から、新しい問題への視野が開けるかもしれない。はたしてミルの経済学の中には、それがリカードから断絶したものと考えられうる要素があるであろうか。これをみるためには、ミル『経済学原理』の構造を規定している三分法が、どのような学史的系譜をたどつて形成されたのか、という点を探つてみる必要がある。

(1)(2)　Mill, op. cit., p. 54. 邦訳1ノ九五頁。
(3)　Ibid., p. 80. 邦訳1ノ一四一頁。
(4)　マルクス『経済学批判序説』邦訳二九二頁。
(5)　Mill, op. cit., pp. 200—201. 邦訳2ノ七頁。

(6) 『資本論』におけるミル批判の箇所が、杉原四郎『ミルとマルクス』（ミネルヴァ書房）一八九頁註⑽で列記されている。

(7) マルクス『経済学批判』邦訳五七頁。

(8) マルクス『剰余価値学説史』（マルクスエンゲルス全集、改造社版⑪）二三六頁参照。

(9) だからといつてマルクスがミルを弁護論的俗流経済学者として軽視していたというわけではない。次のような叙述がある。「誤解を避けるために云つておくが、J・S・ミルなどのような人々は、彼等の旧経済学的ドグマと彼等の近代的傾向の故に咎むべきだとしても彼等を俗流経済学的弁護論者の仲間と混同することは全く不当であろう」（『資本論』青木文庫版(4)九四九頁）。

三　三分法の学史的系譜

ミルの三分法が決して突然に生じたものではなく、古典経済学の歴史的発展のなかで培われたものが、ミルにいたつて開花したものであろうということは、一応誰でもが推測しうることである。その限り、古典経済学の代表者たちの原理体系の構造を、前節までにマルクスについてみてきたように、ミルの三分法の用語に翻訳して解析するという試みも、全く客観的妥当性がないとはいえないであろう。しかし、これを行うに当つて注意すべきことがある。ミルの場合にはこの三分法が極めて形式化されて、その全姿容をあらわにしているが、ミルより以前の古典経済学にそれを期待することはできないのではないかということである。もともとミルにおいては、その三分法が極めて形式化されているということと、それがあらわな形で現前しているということが不可分の関係にある。「価値の理論は完璧である」とまでいつたミルは、労働価値説の創造と深化のための古典経済学の苦斗が終つた地点から出発したのにすぎない。彼にとつては整理という仕事

が残されていただけなのである。これを裏からみれば、古典経済学の先駆者による理論創造の「るつぼ」のなかには、ミルの冷えきつた骨化体系からは逆測することが極めて困難な、高温高圧の状態が実際に存在していたであろうということである。したがつてミルの三分法を用いるためには次の点に注意することが必要である。

それはまず第一に、問題を対象とする体系の最も中核的な部分に限定すること。この部分についてはミルの三分法も多少の有効さを示しうるであろう。この中核的な部分が商品論と労働力商品論の交錯する部分、つまり価値論と剰余価値論とが重なる部分であることは前節でみたとおりである。第二に、対象とする体系を最も重要なものだけに限定すること。このためにはミル以前の古典経済学のなかで、特にスミスとリカードの二人を選べば、巨視的把握としては大体充分であろう。もちろん、これだけに対象を限定しても問題は大きい。必然的に、考察は全く大観的、そして叙述は極めて要約的なものにならざるを得ない。

(1)

まずスミスから。

スミスの労働価値論には、投下労働価値説と支配労働価値説、分解価値説と構成価値説という二組の相反する理論が二重になつて共存しているということは、すでに通説として認められていることである。このような錯綜した価値論は、一体、何によつてもたらされたものであろうか。その価値論の基礎を述べている『国富論』第五章のはじめの部分にみられ

る、「労働の価値」[1] (the value of a certain quantity of labour) なる言葉に注目してみよう。

これは厳密には無意味な言葉である。「労働」というのが価値の実体をなす労働であるならばタウトロギーになるからである。「労働」が「労働力」の意味ならば言葉としては矛盾しなくても、価値の実体としては問題がある。事実スミスにはこのことを思わせる次のような叙述もある。すなわち「同一の労働量は労働者にとってはつねに同一の価値をもつものであるが、彼等を雇う人にとっては、時により大小いろいろの価値をもつかに思われる。……この通俗の意味においては、労働は、他の物品と同じく、実質価格及び名目価格をもつているといつていいであろう。[2]」結局、スミスの「労働の価値」なる言葉は、彼の価値論の混乱を象徴しているもののようである。それには価値の実体としての労働という意味と、別に労働力という意味がになわされている。したがつてまた、「労働の価値」とは労働価値のことでもあるし、労働力の価値つまり賃金のことでもある。『剰余価値学説史』でもこの点は明確にとらえられている。曰く、「ここで彼は、労働の交換価値を、商品の価値の尺度にしているのである。事実上は労賃をである。[3]」また、「『労働の価値』を、あるいは一つの商品（貨幣）が労働をどの程度買いうるかを、もう一つの価値の尺度にしたことは、スミスが価格の理論を述べ、利潤の率に対する競争の作用を説明する等々のばあいの彼の議論の展開にさいして、攪乱的に作用し、一般に彼の著書からあらゆる統一性をうばいとり、また彼における一群の本質的問題をさえ研究からしめださせるにいたつている[4]」と。スミス価値論の二重性は商品の論理と労働力商品の論理との交錯によつて生じたものであること、およびそれがスミス価値論理解の軸点であることが明らかであろう。

それではこのことを基礎にして考えると、スミス体系の基本構造は、三分法の用語で表わせば一体どういうことになるであろうか。『国富論』の篇別構成とあわせて考えてみよう。スミスは第一編「労働の生産力改善の原因と、その生産物が諸階級の人々の間に自然に分配される順序について」を次のように構成している。

第一章「分業について」、第二章「分業を発生させる原理について」、第三章「分業は市場の広さによって制限されること」、第四章「貨幣の起源及び効用について」、第五章「物品の実質価格と名目価格、即ちその労働価格と貨幣価格について」、第六章「物品の価格の構成部分について」、第七章「商品の自然価格及び市場価格について」、第八章「労働の賃金について」、第九章「資本の利潤について」、第十章「労働及び資本の種々なる用途における賃金及び利潤について」、第十一章「土地の地代について」(以上第一編)。

この序列をみてまずいえること。第一、二、三の三つの章は生産論といってよいであろう。次に、第八、九、十、十一の各章はいずれも分配論である。問題は第四、五、六、七の四つの章である。これらの各章は表向きからいうと貨幣論および価値論、つまり交換論である。〔生産→交換→分配〕という序列のようにも見える。しかし、もう一歩立入って考えよう。第四章の貨幣論を除いて、第五、六、七の三つの章は、すでにみたスミスのかの混乱の場である。ここで彼は価値論を展開しながら事実は労働力商品の論理をからませている。つまり擬装された生産・分配論がしのびこんでいるわけである。しかも注目すべきことは、第五章がすでにみたような仕組で商品と労働力商品の論理とを重ね合わせ、その故にまたすぐれて生産論的であること。これに対して第六章は構成・分解価値説であって、利潤と賃金の範疇を検出する分配論

であること、さらに第七章は、そのなかで利潤および賃金の自然率と需給の変動が考察される価格論（生産価格に近いもの）、つまり交換論であること。結局、全体として交換論であると考えられる第五、六、七の各章は、内部的にはそれぞれ独自に〔生産論→分配論→交換〕の序列を構成するような傾向を示しているわけである。この場合もちろん最終的包摂者は交換論である。また第六章においては、資本（ストック）の蓄積と私有を契機として価値の分解と構成が生ずるとされるのであるが、この契機はマルクスのように生産の結果としてでてくるものではない。とられている立場は非歴史的・自然的な生産が資本（ストック）の蓄積というこれも自然的な条件の存在する状況のなかで行われたらどうなるかという、マルクスとは全く逆のものである。それに構成・分解価値説の没概念的傾向からしても、スミスのこの場合の生産と分配の関係は後者が前者を包摂するということであろう。以上を整理すると、第五、六、七の三つの章については、その構造は【{(生産)→分配}→交換】という図式で示される。

ここに注意すべきは、これが第一編のなかの交換論的な部分に限られるということ、この外側に生産論としての第一、二、三の各章、および、分配論としての第八、九、十、十一の各章があるということである。しかし興味あることには、スミスは第四章の末尾において、次の第五、六、七の各章を一括してその叙述プランを附記している。[5] また第七章の末尾においては、やはり第八、九、十、十一の各章を一括した叙述プランを附記しているのである。[6] これからすればスミスは明らかにこれら三群を区別していたのであつて、その境界に一種の論理的断絶を認めていたのであろう。そのせいか、第一、二、三の各章はすぐれて生産論としての生産論の色調をおびていて、第五、六、七章の部分のための序曲的役割しか

果していない。同様に、第八、九、十、十一章の部分は、第五、六、七章の部分の結果を整理するための終曲として、分配論としての分配論の色調が濃い。結局、スミス『国富論』第一編の中核部分は、第五、六、七章の部分なのである。この部分の叙述が他に比して極めて圧縮された内的統一を保っているのは、それを立証するものであろう。

（2）

次にリカードについてみよう。

リカードはスミス批判から出発する。したがってリカードについては、すでにみたスミス体系の中核部分に対応する部分をみるだけでよいであろう。すなわちリカード『経済学及び課税の原理』の第一章「価値論」だけに限られてよい。この第一章は他の章に比して極めて大きな比重がかけられ、それ自身七つの節を含む。（他の章は全然節に細分割されていない）。このことからしても第一章がリカードの体系において占める位置の重要さが明白である。その内容は、商品ばかりでなく、労賃、資本、利潤、さらには一般的利潤率、流通過程からでてくる資本のさまざまな形態、同じく自然価格と市場価格も想定されての価値論である。したがってこの点でもスミス『国富論』の中核部分とほぼ完全に照応しているわけである。

内容に入ろう。リカードはスミスの混乱の中核部分を直接に批判することから始める。第一節の表題は「一商品の価値、即ち何でもこれと交換されるべき他の商品の数量は、その生産に必要な相対的労働量によってきまり、その労働に対

して支払われる報酬の多少によつてきまるのではない」[7]という。スミスを苦しめた問題は、リカードにとつては存在しないも同然である。前者の混乱の集中的表現たる「労働の価値」という用語に含まれていた、投下労働と支配労働、死んだ労働と生きた労働との対立はいかに処理されているのか。リカードはこれを相対的労働量と労働の報酬との対立に還元している。彼はスミスの「労働の価値」のなかから相対的労働量を抽出して、これを残つたもの、労働の報酬と対立させたのである。このことによつて、投下労働と支配労働の対立を止揚することは、さして困難ではない。しかし死んだ労働と生きた労働との対立を止揚するには不充分である。『剰余価値学説史』では次のようにいわれている。「これでリカードが、A・スミスの矛盾の内面的理由たる問題を解決したのではけつしてない。労働の価値と労働の量というのは、対象化された労働を問題とするかぎり、やはり同義の『表現』である。対象化された労働と生きている労働とが交換されるや否や、それらは同義の『表現』たることをやめる。」[8]

リカードは結局、単なる商品論の範囲内で支配労働価値説を揚棄したにすぎない。ところがスミスの支配労働価値説の根源は、他ならぬ労働力商品の次元にあつた。スミスによると「賃労働にたいしては価値法則はあてはまらない。したがつて、価値法則は資本主義的生産をけつして支配するものではない。ここに一つの矛盾がある。これが、A・スミスにとつて一つの問題である。第二の問題は、……ある商品の資本としての利用価値〔Verwertung〕は、それがふくんでいる労働に比例するのではなく、それが支配する他人の労働、その商品自体にふくまれているよりも多くの他人の労働にたいしてその商品が与える支配力、に比例する〈という事実に存する。〉事実これこそ、資本主義的生産の開始とともに、商

品の価値はそれがふくむ労働量によつては決定されず、それが支配する労働によつて、したがつて労働の価値によつて決定されるのだという主張の、第二の秘密な動機である。[9]」リカードはスミスの混乱の根抵にあつたこのような重要な問題を解決しようとしていたのだろうか。そうではない。「リカードは簡単に、資本主義的生産では事実そうなつているのだ、とこたえている。彼は問題を解決しないだけではない。A・スミスにあるその問題に気づいてさえいない。彼の研究の構想全体に照応して、彼は、労働の価値――つまり労賃――が変化しても、労働自体とは異なる商品の価値はその商品にふくまれている相対的労働量によつて決定されるということが廃棄されはしない、ということの証明で満足している。『この二つは等しいものではない。』すなわち、『一商品に投じられた労働の量と、その商品が購買すべき労働の量』は等しいものではない。この事実の確認で、彼は満足しているのである。[10]」かくてリカードは問題さえも提起しない。

産業革命に基礎づけられた資本制生産の確立と力に満ちた発展、この事実の上にリカードは腰をすえる。彼にとつては、資本制生産こそが「自然」である。これを確認し前提することに何の疑義があるのか。リカードはこの厳たる事実の上にいなおつて、資本制生産生成期の未分化な論理に悩んだスミスの顔をさかなでしたのである。彼は第一章「価値について」で、すでに一般的利潤率を前提している。そのすべての例証は、「彼にとつて、一般的利潤率という前提を密輸入させるという働きをしているだけである。[11]」ではこのようなリカードの体系は、三分法的にいかに構成されているのであろうか。

その「相対的労働量」という言葉に注目しよう。これはスミスの「労働の価値」に対応するもので、リカード価値論の本質を具体化させた言葉といえるものである。労働がここで相対化され量化されている。極めて交換論的な発想である。

第一節のはじめの部分には稀少価値さえとりあつかわれていることが、それを裏づける。[12] しかしそれはすでに指摘したように、一般的利潤率を自明の事実として前提してのことである。つまり、すでに一旦、労働力商品の論理を内化し、生産価格の論理次元を経た上でのことである。これは明らかに、スミス『国富論』の第一編第七章「商品の自然価格及び市場価格について」つまり、さきほどの図式【{(生産)→分配}→交換】の「交換」に当るものであろう。しかしまたそれがスミスとは異なつた視角でとらえられていることも見落してはならない。リカードにおいては一般的利潤率が逆に前提されているからである。スミスが到達すべき目標が、リカードの出発点となつている。方向が互いに反対である。ここから出発して「労働の報酬」へ進むリカードは、交換→分配の論理をたどつているといつてよい。ただし、それはスミスがならした道を、再び逆に同じ次元で折返すのではない。高い次元で行うのである。そのためには極めて高圧の論理力が必要であろう。そしてそれは、ともすれば現実の論理の立体性を平面化しかねまい。一面での労働の量化（抽象的人間労働への指向）、他面での相対価値論（需給論への傾斜）が、このことを物語つている。もともとリカードはスミスの中に胎動していた問題の外から逆方向に出発した。それだけに危険もあるわけである。問題は解決されないままに外的な論理の圧力が加えられる。どのようなことが起るだろうか。

第二節「品質を異にする労働は異なる報酬をうける。このことは商品の相対価値上における変動の原因たるものではない。」ここでは労働の報酬を考察するとしながら、事実上労働の評価→異質な労働時間の比較が行われ、両者の区別は極めて曖昧である。スミスの「労働の価値」の混乱が、ここでより抽象的な形で再現する。そのことがさらに、「私が読者

の注意をひかんと欲する研究は、商品の相対価値変動の結果に関するものであつて、その絶対価値の変動に関するものではない」[13]という相対価値論の強調につながる。そして第二節は、賃金の変化が「短期間に対しては、諸商品の相対価値の上にほとんど影響を及ぼすことがない」[14]というスミス的問題の経験主義的かつ形式的な解決または回避で終るのである。

第三節「商品に直接加えられた労働がその価値を動かすのみならず、かかる労働を援助する器具道具及び建物に投ぜられた労働も、またそうである。」第四節「諸商品の生産に投ぜられる労働の量がその相対価値を左右するという原則は、機械その他の固定かつ耐久的な資本の使用のためによほどの修正をこうむる。」第五節「価値は賃銀の騰落と共に変動しないという原則は、また資本耐久性の同じでないこと、及びその資本使用者に帰還する速さが不同であることによつても修正される。」これら三つの節は、表題からもわかるとおり、生産論的な傾向を示している。生産過程に根拠づけられての価値論の問題が考えられているからである。第三節では、すでに対象化された労働と投下労働とが同視される。それもただの同視ではなく、賃金と利潤が存在する、つまり死んだ労働が不変資本として機能しうる状態のもとでのそれである。この同視は、もしそれが商品論の次元でなされたものならば、全く問題はないであろう。しかしここではそうでない。にもかかわらずリカードは同視をあえてする。「労働賃金の変動は、これら諸商品の相対価値に何らの変動をひきおこしうべきものではない。」[15]第二節の表題でいわれたことが、「労働賃金」という具体化された次元でくり返えされる。このようなことは一体何を意味するのか。すでに一般的利潤率を前提し、実質上、生産価格となつたものを、第二節では、抽象化された形ではあるが、スミスにおける「労働の価値」的混乱にも似て再現させていた。それがまた第三節でくり返さ

れるのである。しかし単なるくり返しではないことも明らかである。第二節での「労働の報酬」が、ここで「労働賃金」になつているのは、第二節がすぐれて商品論的であるのに対し、第三節が労働力商品の次元で語られていることを示す。リカードがここで何をいおうとしているのかは、もはや明白である。彼は、事実上の生産価格を、価値に還元あるいはこれと同視して、そこから出発しながら、改めてまた、ここで、利潤—賃金関係についていおうとしているのである。それは当然生産価格の形成にまで推し進められるであろう。第四節は生産に使用される耐久資本のために、投下労働価値法則が修正されるということをとりあつかうことになる。第五節は資本耐久性の不同、回転速度の不同が、今度は——注意すべし——賃金の騰落は価値を変動させないという原則を修正することがとりあつかわれる。ちよつと注意すればわかることであるが、第四節は第一節に、第五節は第二節に、それぞれ対応している。修正される法則が、それぞれ第一節および第二節で述べられていたのである。残された第三節こそは、この修正を媒介するものであることも、表題から明らかであろう。第三節のもつ意義はこの意味で極めて重要である。

このへんで第三節を媒介として行われた価値法則の修正が何を意味するかが問われなければならない。それは端的にいつて、生産価格の二重化である。リカードは事実上、生産価格から出発しながら、再び生産価格を構成する。屋上屋を重ねる式であるが、彼にとつてはやむを得ないことであつた。つまり無意識的に前提されたものから、意識されたものを導出しなければならなかつたのである。ところで生産価格によつて生産価格を構成することは、もしそれが徹底して完全に行われるならば混乱を産み出すであろう。[16] リカードはこれを価値法則の修正と意識したり、また第六節では、不変の価値

尺度を求めるという混乱を見せている。彼もまたこの底なし沼に一歩踏みこみかけたことを示すものであろう。しかし、このギリギリの危険を冒すことなしには、彼の投下労働価値説が生れなかつたであろうことも、たしかである。

さて、以上みてきたことからすれば、リカードの原理体系の構造図式は、もはや自明であろう。彼はスミスの問題にはふれないままで、スミスの体系に対して外側から逆方向に論理的圧力を加えただけなのである。したがつてその構造は、もちろん、【交換→{分配→(生産)}】である。

(1) A. Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, the modern library, p. 30. 大内訳『国富論』㈠六八頁。

(2) Ibid., p. 33. 邦訳㈠七三頁。

(3) 『剰余価値学説史』長洲訳、国民文庫版、第一冊、一三四頁。

(4) 同訳、第一冊、一三九―一四〇頁。

(5) Cf., Smith, op. cit., pp. 28―29. 邦訳六五―六六頁参照。

(6) Cf., Ibid., p. 63. 邦訳一二八―一二九頁参照。

(7) D. Ricardo, The Principles of Political Economy and Taxation, Works and Correspondence of David Ricardo, Vol. I, p. 11. 小泉信三訳『経済学及び課税の原理』岩波文庫版上巻一三頁。

(8) 『剰余価値学説史』長洲訳第二冊一四二―一四三頁。

(9) 同訳　第二冊　一四三頁。

(10) 同訳　第二冊　一四四頁。

(11) 同訳　第二冊　五二頁。
(12) Cf., Ricardo, op. cit., p. 12. 邦訳　上巻　一四頁参照。
(13) Ibid., p. 21. 邦訳　上巻　二四頁。
(14) Ibid., p. 22. 邦訳　上巻　二四頁。
(15) Ibid., p. 28. 邦訳　上巻　三一頁。
(16) マルクスも実はこの問題を完全に解決しているものではない。『資本論』(青木文庫版(9)二五〇頁)にこの問題に関する指摘はあるがそれだけにとどまつている。

四　むすび

——古典経済学の歴史的展開とミルの位置——

しばらくミルそのものをはなれていたが、ここでもう一度、第二節の末尾で提起しておいた問題を想起しよう。それはミルがリカードから断絶しているか否か、ということであつた。前節においてスミスからリカードへと、その原理体系の三分法的構造を追求してきたのもこのためである。これによつて得られた二つの構造図式を、すでにみたミルとマルクスのそれとあわせて、時代順に列挙してみよう。

スミス　【{(生産)→ 分配}→ 交換 】
リカード　【 交換 →{分配 →(生産)}】

ミル　【　生産　↓{分配　↓(交換)}】

マルクス　【{(交換)↓　分配}↓　生産　】

右のような図式系列だけみても、リカードとマルクスの間にはさまるミルの独自的自立性が推測できる。しかしそれだけにとどまつたら、名実ともに悪しき図式主義におちいつている、といわれてもしかたがないであろう。それを避けるためにも、前節までにみてきたことに若干の補足を加えながら、これらの構造図式の歴史的展開の必然性を、スケッチ風に再構成してみたい。

前節(1)の末尾で指摘しておいたように、スミス『国富論』の第一編の全体は、この構造図式には含まれていない。この外側にまず、第一、二、三章の生産論としての生産論があり、またうしろには、分配論としての分配論とみなされうる第八、九、十、十一の各章が続いている。しかも、この構造図式で示される部分に当る第五、六、七の各章は、一括して価値論つまり交換論であつた。しかしこの部分の内部がさらに、生産、分配、交換論的なものに分かたれていることは、構造図式に示されているとおりである。ところで、ここで少し注意してみれば、第五、六、七章、つまりこの構造図式そのものが、実は生産論（外側の）の一部にすぎないことがわかる。第一、二、三章の生産論は、その実体は分業論である。さらに、第五、六、七章は概念的には把握されていないが事実上、労働力商品を基礎においた他ならぬ労働価値論である。第四章の貨幣論は分業論を労働価値論へと媒介する触媒の役割を果すだけだと考えてよい。してみるとこの第五、六、七章は、実のところ、交換論的な生産論なのである。他方、第十一章は地代論になつているが、そのうしろの大部分

は、『最近四世紀間における銀の価値の変動に関する余論』をはじめとする貨幣金属価値論になつていることが注目される。この部分は、むしろ分配論からきりはなして交換論とすべきところであろう。これらの点を考慮すると、スミス『国富論』第一編全体は、次のような二重構造をもつものとして図式化できる。（数字は第一編の章を示す）

1・2・3・4　5　6　7　8・9・10・11　11

［生産・【｛(生産)→分配｝→交換】］→｛分配→(交換)｝］

すなわち、スミスにおいては、生産→分配→交換の論理が二重になつている。外側においては、形式的つまり物理的に自然が包摂者となる仕方でである。これは彼の自然主義にもとづく。しかしスミスはこれだけにはとどまらない。重商主義の批判を完遂した彼は、生産を価値論としての内部的な交換論と結合する。このとき生産→分配→交換の論理も縮小されて閉じこめられるが、それは逆に交換を包摂者としてである。自然主義にさからう生産関係視点がここで露頭をみせる。だがそれは決定的なものではない。スミスの二面性、豊富な問題を提起しながらも、それをどれ一つ解決しえない曖昧な性格は、ここに根ざしている。かくてよい意味でも悪い意味でも、スミスは古典経済学の即自的段階を体現した学者であつたといえよう。

リカードはどうか。彼はスミスの到達した点から出発して、それをさらに徹底する。生産の自然性を交換にまで。彼にとつては交換つまり価値そのものも永遠な自然である。だからリカードはスミスのように交換論を生産論で始めるというようなまぬるいことはしない。交換論としての交換論から怖れげもなく出発する。スミスの価値論が逆倒されて、自然

主義的合理性の論理のしめ木にかけられる。しかし、そのためには資本制生産の事実を絶対化しなければならない。それができる歴史的条件はととのつていた。一般的利潤率が絶対的前提としておかれ、うしろに労賃の需給による決定論が導入される。[1] 前者は不変資本に関連し、後者は可変資本に関連する。この肝じんな所を固定しておいて、価値論に強圧をかけるとどういうことがおこるか。

一般的利潤率 ↓

（可変資本的要素 ←→ 不変資本的要素）

↑ 賃金の需給決定論

右図にみられるように、価値論のなかに含まれている可変資本的側面と不変資本的側面とが、価値実体の純化に逆比例して、相互に反撥しあい、スミス―リカード的価値論（価値論と剰余価値論とが未分化なもの）のなかでは調和し難くなる。その結果が、リカードにおける価値論の修正となつて現われる。そして彼はこれをギリギリの限度まで徹底したのである。このような性格をスミスとの対比において考えると、リカードは古典経済学の対自的段階を体現するものであるといえよう。

ミルはリカードのこのような傾向に便乗して、価値論のなかから可変資本的なものと不変資本的なものとを引出してしまう。それらは各々自然的な労働と資本とに固定化されざるを得ない。同時にリカードにとつての前提であり基礎であつ

た、一般的利潤率と賃金の需給決定論とは、対象的社会実体たる生産関係を見失つて、浮動的な人為的任意性が支配する分配論の領域に収斂させられる。この結果、価値論は生産論の領域から追放され、その表皮のみが交換論として角質化する。他方すでに、生産論の領域には形態規定を完全にはぎとられた没概念的労働力商品とその対立物たる富としての資本が残されていた。しかし、形態規定をはぎとられたとはいえ、実体と機能を保持している以上、それらは生産、分配、交換の関係を痕跡としてとどめる。これが生産論である。この場合もちろん生産が形式的な包摂者となる。図示すると左のようになる。

［生産・【生産→｛分配→(交換)｝】→｛分配→(交換)｝］

つまり、この場合スミスと似た二重化が起つている。異なるのは、ミルの二重化は、同じ構造【生産→｛分配→(交換)｝】が同じ方向に二重化しているということである。そのためミルの構造図式は平面化して、みた眼には極めて形式的にスッキリとしたものになつた。が反面、生産が自然的必然性、分配が人為的任意性と反撥的に極端化するのは、このようにスミス的な形式的包摂構造（スミスの外側の構造）が二重化したためである。またミルがスミスへの還帰意識をもつのは、内側の構造の包摂関係が逆になつているだけで、あとは同じ構造をとつているからであろう。リカードを媒介にしたスミスへの還帰、つまりスミスの否定たるリカードの否定、これがミルの性格とすれば、それは古典経済学の即対自的段

階の体現者であるといえよう。そしてこのことによってミルがリカードから断絶されているということが立証されたわけである。[2]

最後にマルクスは、ミルによって生気を失うほどにまで形式化された体系に、それまでの古典経済学には欠けていた、新たな核力たる労働力商品を導入して、古典経済学の体系をより高い次元で復活せしめる。その体系は、純一にして堅牢な構造を示し、ミルにおいて分裂していた自然と歴史は、生産に基礎をおく社会的必然性として統一されている。このこともまたマルクスがミルを媒介にしなければならなかったことを示すものであろう。訂正した図式を列挙しておこう。

スミス　　[生産・【{(生産)→分配}→交換】]→{分配→(交換)}

リカード　　【交換→{分配→(生産)}】

ミル　　[生産・【生産→{分配→(交換)}】]→{分配→(交換)}

マルクス　　【{(交換)→分配}→生産】

以上でJ・S・ミルの『経済学原理』の構造を明らかにし、これによってその学史的位置を定めるという、本稿の意図はほぼ達し得られたものと考えたい。もちろん、それは極めて巨視的な観点からのものではある。ミルの三分法を枠型として考察を進めてきたのは、一つにはそうするためでもあった。三分法とは要するに、経済学の論理構造にのっとった上向法としての篇別構成法である。ただそれを本稿ではミルの場合を基準にしてすべてをみたところに一つの試みがあった。

その根抵には、古典経済学がミルにおいてはじめてそれが到達すべきものにまで成熟したのではないかという予想がおかれている。産業革命の完成、それは同時にイギリス産業資本主義が完全に成熟しきって、その固有本具の問題に直面したことを示すものに他ならない。この時点において、古典経済学のそれまでの成果をすべて整序しかつ集大成せしめたミルがその方法として用いた三分法こそは、古典経済学の最後の成果であり、またその後に展開すべき新しい問題に対する態勢整備の唯一の方策でもあつた。しかも、それはミル自身が予想したよりも大きな効果をもたらしている。ミルの『経済学原理』はそれが出版されるや日ならずして版を重ね、その後マーシャルの『経済学原理』が出るまでの間、イギリス経済学の主流をなす理論として迎えられたのである。ミルが『経済学原理』第一版の序文においてそれを新事態に対処すべき第二の国富論たらしめようと述べた意図は充分に達成せられたわけである。本稿の試みは、ミル経済学が十九世紀後半の歴史的現実の中で果した役割とその意義に関する評価が、従来の研究においては多少不充分なのではないかという考えに動機づけられている。しかしそれはまだ全くの出発点たるにとどまり、かくされた大きな問題の所在とその大体の輪廓をとらえるための手さぐりであるにすぎないということも認めねばならない。したがつてこれによつて提起される問題への展望は註の形で記しておくにとどめたい。(3)

(1) Cf., Ricardo, op. cit., chap. V "on wage" p. 91—101. 邦訳上巻第五章八五—一〇二頁「賃銀論」参照。

(2) ミルのリカードからの断絶ということは、実は方法論の面からもいえることである。本稿ではこの問題を取上げることができないので、その要点だけ記しておく。

ミルは父ミルの徹底した早教育によつて、すでに二十才以前に前途あるベンサム主義の斗士としての活動を開始していた。しかし二十才の秋、突然、彼のいわゆる「精神の危機」を体験しそれまでの確信を喪失してしまう。この暗い谷間のなかで彼は苦しい摸索の生活を送るのであるが、その回復につれて、従来のベンサム主義に欠けていた歴史主義の方向に一つの解決法を見出す。この頃行われた父ミルとマコーレーの論争は、前者の幾何学的演繹法、後者の化学的帰納法という両極端をなす社会科学方法論に対する批判をミルに抱かしめるのである。彼はその後徐々にフランスの歴史主義、サン・シモンや特にコントに接近する。そしてコントから社会科学の方法としての逆演繹法をとり入れ、父ミルとマコーレーの両極端を統一したものと考えられる具体的演繹法とともに自己の社会科学の方法とするのである。ミルのベンサム主義はこの過程のなかで修正を受け、むしろその根抵に歴史主義をひそませるような形になる。その『経済学原理』は、このように彼の一生にとつて極めて重大な時期たる第二期のあと、第三期において書かれたものであるから、ミルにおけるベンサム主義修正のあとを考慮しないでよいはずはない。ことにベンサム主義の経済的側面がリカードの経済学であつたことを考慮するならば、これと修正ベンサム主義者としてのミルの経済学とが断絶しているということが、一層広い背景のもとに立証されるものと考えられるのである。（この点に関しては、『ミル自伝』、ミル『論理学体系』第六巻『道徳科学の論理』、馬場啓之助『ジョン・S・ミル』などを参照のこと）

（3）本稿でみたようなミル経済学の性格からすれば、これを単なる折衷論者としてかたづけるには多少の問題がある。もし一歩を譲つてそれが折衷論であることを認めたにしても単純な意味でのものではあるまい。ミルの経済学は歴史のこの段階で当然出現すべき必然性をもつていたのである。資本制生産の本質的矛盾の展開たる恐慌と労働者階級の貧困に対する彼なりの対決意欲が彼の経済学の性格を規定している。労働力商品論と価値論との直接的な結合状態を否定して、前者を後者の外側に放逐したことは、たしかにミルの経済学から生気を奪い去り、形式的な整合性を固定せしめた。しかしまた反面、この性格がミルのあと今日まで存続しえた資本制生産の構造的安定性を表現したものであるとはとれないものだろうか。『経済学原理』の価値論は、価値

の実体よりも需給論をむしろ先行せしめて、徹底的な相対価値論の姿をとつている。恐慌その他資本制生産を支配する無政府性のもたらすものは、生産と分配からきりはなされた流通表面上のこととされ、その限り、分配の矛盾さえとり除けば徐々に克服可能なこととされる。こうして利潤率低下の極限においては永遠の定常状態としての資本主義の天国がとかれる（『原理』第四篇参照）。そしてこの状態は彼の『経済学原理』における交換論、すなわち価値論が「完璧である」ということのなかに前以つて理論の形で現われていたのである。したがつて、ミル経済学の批判は、その価値論の具体的な批判にまで進んで、はじめて充分なものとなりうるといつてよいであろう。そしてそれは同時に現在まで存続し将来もなお一定期間存続しうる資本制生産そのものの批判でなければならないのである。この意味からすればミルの経済学は今日でも未だ生き続けているのであつて、それが提起した問題は今なお未解決のものである。それどころか、むしろ現在において再認識されるべきものとして新な姿態のもとに出現しつつあるといえるかも知れない。マルクスのミル批判は彼が価値論においてはリカードに直結していたために、生産分配論批判はともかく（これは『経済学批判序説』で一応達成されていると考えられる）、価値論批判においてほとんどみるべきものはない。それは単に外側からの批判、指摘の断片にとどまつていて、ミルの内面に即したものではない。『剰余価値学説史』においてとりあげられているのはその『原理』ではなく、その前に書かれた『経済学試論集』に含まれているものである。これらの点を考慮すれば、マルクスは特に価値論の面においてはミルを内在的に克服しようとはしなかつたし、またしてもいないといつても過言ではない。彼はその必要を認めていなかつたのである。したがつてまた、この面ではミルはマルクスの先行者というよりも対立者としての性格を依然として保持しているといえるのではあるまいか。伐られて死んだ筈の切株からまた新しい芽が出て枝を張ろうとしている。マルクスが知らなかつた資本制生産の新しい側面が、ミルの経済学によつて、百年も前にいわれたことから展開されようとしているのである。今日、ミル経済学の再評価と再批判が必要な理由は以上のように理解される。

〔古典経済学をスミス→リカード→ミルの段階区分によつてとらえようとされる内田義彦氏が、マルクスのミル批判（生産-分

配峻別論批判）とは異なつて、「生産=分配の領域から永遠に価値概念を放ちく」した点においてミルを批判されているのは、極めて示唆に富んだ事実である。（出口勇蔵編・新訂『経済学史』一二五頁参照）〕

〔一九六〇・一・一〇〕